

(つづき)

7. (1) 民俗学者のような関心を示しているところは実に多く、その一部項目を箇条書きにする。常念岳の名前の由来 雨乞の儀式の手順 老婆の石伝説 血族結婚の村 天の岩戸神話 魔除け、厄病神除け、天然痘除け、虫除け等の護符 農民の天気予兆の見方(ミミズが地面に出てくると雨降りなど13種)

(2) 山村住民の迷信信仰のため登山に詞章があったことも記している。笠ヶ岳の絶壁や溪谷にスダマが住んでいて、稔りの時期にその棲処によそ者を連れていくと霊域を穢したとして、穀物が嵐で傷められるという。そのため手を貸した者には村の連中が制裁を加えるという。この迷信のため二度山案内人を雇えず、三度目に義侠心のある猟師頭の判断で内緒に雇うことができたという体験をしている。



上高地のレリーフ

8. 山村住民とどんな触れ合いをして、どんな印象をもったのか。

(1) 山を下ると癒しのため直ぐに各地の温泉や宿の風呂に入り、大変気に入ったようだ。宿の風呂では主人の厚意で一番風呂に入れてもらい、混浴については「男も女もいっしょに入浴しているが、一人として風儀を乱す者はいない。」と記している。また、ある外国人の話として、下山後温泉に入ったら、「家族連れの湯治客の日本人に湯槽の中で、自分の女房、子供を生まれたままの姿で一人ひとり紹介されて、外国人はうろたえたが、その日本人はいかにも懇ろな物腰だったので、その外国人はあいさつに水を差すことはできなかった。」という事例も紹介している。

(2) 宿でも村のなかでも山村住民は、外国人のウェストンに興味を示し見にきたが、「不作法ではなく、あいさつすると必ずやさしい微笑とていねいなお辞儀を返してきた。」とし、子供も日頃からよくしつけられて礼義正しかったと記している。

(3) 当時、宿にはまだ食卓や椅子がなかったので、ある宿では小学校の椅子と机を借りてきて食事のもてなしをしてくれたと記している。

(4) 常念岳より下山し村に着いたら、同行してくれた村長の息子の姿が見えなくなった。ウェストンが早々に風呂に入れるように家人に下山を告げるためであったと理解して、「まだ文明化していないといわれる日本で、この心優しい人たちが自分の国を呼ぶのに好んで使う「クンシ(君子)ノ コク」(紳士の国)という美称が、いかに適切であるかということをしみじみ感じないわけにはいかなかった。」と記している。

(5) ウェストン側の優しさと山村住民の対応をみてみたい。

飛騨高山の宿で同行のミラー(医者)が亭主の友人を診察すると、「亭主はわざわざ茶の湯の席まで設けてくれた。…翌朝、ジンリキシャに乗り込んだ時、驚いたことに、亭主は私たち二人にき

れいな扇子をくれた上、医者のみらーには、お礼のしるしとしてりっぱな短刀を贈ってくれた。」と記している。

山道で伏していた人に薬を与えたところ、翌日その病人が宿まで礼を言いに来て、感謝のしるしとして贈物をもたらったという。

(6) 不愉快なことも当然あった。宿では蚤の多いのに閉口しているし、若者などが隣の部屋で「夜半まで宴会をするのでやかましく寝られない。」ことが多く、一度は宴会費が自分の勘定書きについていた等と記している。ある宿の主人は、「数十センチ床より高くすると蚤は上がってこないと言って、箱を並べてベットを作り蚤をふせいでくれた。」と記し、「蚤はせっかくのご馳走をみすみす食べそこなった。」と冗談を飛ばしている。

9. (1) 中部山岳地帯に入ると、一神教キリスト教の信仰理念とは全く異質の宗教、信仰行事が行われている。仏教、神道、修験道、山岳信仰、迷信、神懸かり等々である。現世観、死生観、罪障観などキリスト教の観念とは相容れないものであるが、できるだけ冷静に距離をおき、民俗学者のような、宗教学者のような冷めた目で洞察しようとしているようだ。どんな言動をしたのだろう。

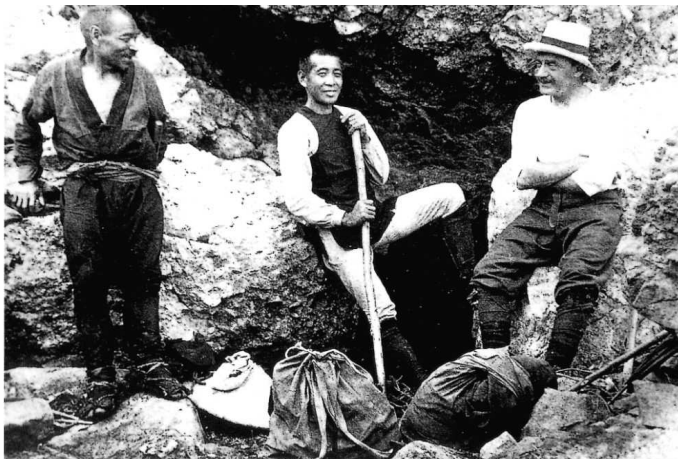
(2) 御岳頂上で観察の機会を得た御座(おざ)の神懸かり・託宣の進行描写には、細大漏らさず記録しようとする筆づかいがみてとれる。

(3) ある村で、「(歌)声に惹かれて行ってみると、それは小さいながら、日本人のキリスト教団の本部であった。キリスト教はここばかりでなく、日本各地の山奥に外国の援助なしでも深く浸透しているのである。」とだけ記している。不思議なほどの自制である。日本語ができるのであるから、本部に入って励ましの一言でも声掛けしないのかと思う(したかもしれない)。

(4) 御岳で一人の巡礼が素裸で滝水の下に入っていったのを見て、「胸の上で手を組み合わせ、身をよじるようにして、前非を悔い、心の浄化を願う祈りを唱えはじめた。心が清浄でなければ、山に登って神聖なる祠を拝み、祈りを捧げても無駄であるという。これこそまことの篤信の人よとばかり、その祈りに耳を傾けていると、あのダビデの言葉がいきいきと胸によみがえってきた。」と記している。そして、旧約聖書「詩篇」の関係部分を引用し、更に「その昔、かの偉大な使徒が書きしるして、—あらゆる国民のうち、神を畏れ、正義をなす人をこそ、神は迎えたまう—と言ったのは、まさにこのような人のことではないだろうか。」と宗教は違っても信仰の人には、キリスト教であれ山岳宗教であれ根底のところ共通のものと認めているようだ。

(5) 御岳頂上で御座という儀礼を調査しているが、そのことについて、「読者の中には、こんなことを研究するのは時間の無駄だと言う人がいるかもしれない。あるいはまた、もう一つの世界、それもけっして高尚とはいえない超自然界、に住むものに関係があると当事者が公言して憚らないような儀式や現象を調査することは、キリスト教徒のすべきことではないと言う人もいるだ

ろう。しかし、自分はそうは思わない。」と断言しており、その調査、探究の姿勢たるや称すべきである。



右からウェストン、根木清蔵、上谷源門次。1913年8月8日、坊主岩小屋で。撮影・ウェストン夫人。(ウェストン『極東の遊歩場』より)

10. (1) 13章の御岳登山部分では、殆どを山岳信仰、修験道、神懸かりなどに充てている。頂上でみた御座とよばれる儀礼によって、神霊が中座(なかざ)に降臨して神懸かりになり託宣が下される儀礼の件りは、興味深いものである。

(2) 御岳で巡礼の一同に出くわして、「日本の巡礼はほとんど例外なく信仰にかこつけた物見遊山の旅をかねているので、騒がしい…」と評し、「この東洋の山岳会」の会費・運営・旅行方法などについて詳述したうえで、先達をイギリスの「クック観光団のコンダクターに似ている。」と記している。

(3) 御岳の頂上で神主の宿に泊めてもらい、「山頂を守るカンヌシと一夜を過ごした。……彼もまた天皇と愛する祖国の名誉のために、戦場に召集されることを望んでいた。」と神主の心境を記し、また、高揚する愛国心のエピソードを幾つも新聞から引用しつつ、「この愛国的な四千万の国民は、戦争の成り行きについて文字どおり一心同体になっているのだった。」と日清戦争初期の世相を分析している。この部分を読みイギリス人読者は、どのように感じとるであろう。なお、日清戦争は1894年(明治27年)7月から1895年3月までで、ウェストンは1894年7月から8月にかけて日本アルプスを北から南に縦走して10月末に帰国している。

11. (1) 最終章の16章で日本の山岳地帯旅行の装備と食料について記している。要は登山先進国イギリスの装備や食料を持っていけばよいと述べているが、滑り易い岩には靴よりワラジが良いこと、大判の油紙3枚でテントの代用品がつかれること、茂みではウールの靴下より脚絆がしっかり脚を守ってくれること等日本の装備についても言及している。

(2) 人々の力を借りる時にしばしば出くわすので、贈物を用意していくと人々の好意を得るのに役立つとし、例えば、猟師にはポケットナイフ、磁石、宿屋の亭主にはハサミ、女子には人形が良いとしている。思うように日本語が話せなくても、信頼のおける日本人の使用人(案内人)を1人連れて行くこと勧めており、また一番経費がかかるのは荷物運搬賃、人力車賃などであり、この金額は交渉次第のため一番厄介であると記している。著者自身は、これらの手配、金額の交渉については宿の亭主や地元の警察官などの世話や協力を得ている。

(3) 「現地の人はそれなりに礼儀をわきまえているように、こちらもそれなりに礼儀正しくすることが大切である。一つ確かなことは、私たち自身がしばしば礼儀にもとり、不作法なことをするので、それが度重なるうちに日本人に反映して、不作法なことをされるようになるのである。」と的確な教訓を講じている。(おわり)

参考資料

「日本アルプスの登山と探検」ウェストン著 青木 枝朗訳 岩波文庫474-1

「山の名著 明治・大正・昭和戦前編」近藤信行編 自由国民社

「山岳信仰 日本文化の根底を探る」鈴木正崇著 中公新書2310

「登山の誕生 人はなぜ山に登るようになったのか」小泉武栄著 中公新書1592